

## 中日兩國文學裡的「猿神退治」譚 —以『今昔物語集』與唐代傳奇為主—

陳明姿\*

### 摘要

《中日兩國的文學裡收錄了不少與猿有關的故事，這些故事也未必都是兩者和平共處的故事，當中也有人與猿爭鬥的「猿神退治」類型的故事，在日本現存古代的說話文學當中最早收錄「猿神退治」類型故事者當屬『今昔物語集』卷二十六的「美作國神依獵師謀止生贅語第七」及「飛彈國猿神止生贅語第八」的兩則故事，這兩則故事與中國的故事有何關連呢？此外，其又與中國同類型的故事有何異同呢，是一饒富趣味的問題，拙論作為探討中日兩國古代故事的關連及異同之一環，特別聚焦於『今昔物語集』這兩則故事，以考察中日兩國故事的相關及「猿神退治」譚之異同。

關鍵詞：猿神、活人供品、英雄、神仙、今昔物語集



臺灣大學學術  
期刊資料庫

---

\* 台灣大學日本語文學系教授

## The ape stories found in Konjaku monogatari (Ancient Japanese Literature) and The short tales from Tang Dynasty (Ancient Chinese Literature)

Chen, Mung-tzu\*

### Abstract

Tales about Apes and humans can be easily identified both in Japanese and Chinese literature. Among these tales, humans and apes do not necessarily have a peaceful coexistence. The “Monkey God Extermination (Sarugami Taiji)” genre depicts man and ape at war. Two tales from the Scroll 26 of Konjaku Monogatari are the earliest records of the (“Monkey God Extermination (Sarugami Taiji)” genre) which can still be seen today. This thesis is going to exam these two tales and their similarities and differences to those of the same genre from China. Having previously researched connections between ancient Chinese and Japanese tales, this research focuses on these two tales from Konjaku Monogatari with the purpose of examining the difference between ancient Japanese ‘Setsuwa’ [說話] and Chinese Tales.

Keywords : (Monkey God/ Sarugami) , Living Sacrifice, Hero, Fairy Hermit, Konjaku

---

\* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University



## 日中両国の古代文学における猿神退治譚 — 『今昔物語集』と唐代伝奇を中心に—

陳明姿\*

### 要旨

現存する日本古代の説話集の中で、最も早く猿神退治説話の例が見られるのは、日本最大の古代説話集である『今昔物語集』の中に収録される卷二十六の「美作国神依獵師謀止生贅語第七」と「飛騨国猿神止生贅語第八」の二話である。この二つの説話は中国の説話とどのようなかかわりをもつのか。また、中国の同類型の説話とどのような異同が見られるのか。興味深い問題である。小論は日中両国古代の説話の関連と異同を探求する一環として、『今昔物語集』にあるこの二つの説話に焦点をあて、中国の説話とそのかかわりを究明した上で、両国の猿神退治譚の異同を考察する試みである。

キーワード：猿神、人身御供、英雄、神仙、今昔物語集

---

\* 台湾大学日本語文学系教授



## 日中両国の古代文学における猿神退治譚 — 『今昔物語集』と唐代伝奇を中心に—

陳明姿

### 一、序

猿はこの世界における最初の霊長類である。地域によって多様な異なる種類の猿がおり、外形ばかりでなく、その知能も他の動物より人間に近い。そのためであろうか、人間も古くから猿に対して興味を持ってきた。多くの国の文献に猿に関する話が収録されている。日中両国の文学においても様々な猿説話が語られている。それらは、すべて人間と平和的に共生する話ばかりでなく、中には人間と猿と戦う猿神退治話型の説話も見られる。現存する日本古代の説話集の中で、最も早く猿神退治説話の例が見られるのは、日本最大の古代説話集である『今昔物語集』の中に収録される巻二十六の「美作国神依獵師謀止生贅語第七」と「飛驒国猿神止生贅語第八」の二話である。この二つの説話は中国の説話とどのようなかかわりをもつのか。また、中国の同類型の説話とどのような異同が見られるのか。興味深い問題である。小論は日中両国古代の説話の関連と異同を探求する一環として、『今昔物語集』にあるこの二つの説話に焦点をあて、中国の説話とそのかかわりを究明した上で、両国の猿神退治譚の異同を考察する試みである。

### 二、人身御供

「猿神退治」説話は『日本昔話集成』によれば43話もある<sup>1</sup>。が、『今昔物語集』の巻二十六に収録された「美作国神依獵師謀止生贅語第七」と「飛驒国猿神止生贅語第八」の二話は日本文学に現れた早い例である。この二話からこの類型の説話の原型をある程度窺う

<sup>1</sup> 関敬吾『日本昔話集成・第二部 本格昔話3』（日本 東京 角川書店 昭和30年6月）p.1252

ことができると思われることから、ここではまずこの二話の大筋を見よう。

「美作国神依獵師謀止生贄語第七」の筋は次のようである。

毎年の祭りの際美作国中山の猿神に生贄を供える習わしがあった。生贄にはその国の未婚の娘を立てることにしていた。ある時、東國の方から一人の獵師が所用でこの国へやって来た。そのうち生贄のことが耳に入った。ある日、所用のためその年の生贄に指定された娘の家へ行ったとき、娘が悲しんでいる様子を見て、同情の念にかられた。その両親に道理を言い聞かせたあと、娘を妻として所望して、娘の身代りになると言った。獵師は自分の飼い慣らした犬の中から、特に良いのを二匹選び出し、猿を食い殺す練習をさせた。祭りの当日になり、猿が長櫃をあけようとする、獵師がやにわに飛び出し、二匹の犬の援助で、首領の大猿を殺した。二匹の犬は更に他の猿達を多く食い殺した。生き残った猿達は抵抗する術もない。そのうち、猿神が一人の宮に乗り移り、今後一切生贄を求めないから、許してもらえないかと言った。獵師は猿神にさらに堅い誓約をさせた後、許してやった。その後、その里は人身御供の習俗がなくなり、獵師とその娘は夫婦として幸せに暮らしたわけである。<sup>2</sup>

次に「飛驒国猿神止生贄語第八」を見よう。

ある僧が行脚しているうち、飛驒国まで行ったが、山の中で道に迷って、大きな滝が幅広く高所から落ちているところに行き当たった。引き返そうにも道がわからない。僧は滝の中に踊り入ったが、意外にも無事通り抜けることができた。滝を隔てて、別世界が展開する。そこには多くの人家が見えた。その人達が僧を見ると、争って彼を自分の家へ引っ張って行こうとする。最後はその郡司殿の裁定で、僧はある浅黄服の男のもとへいった。その人は僧を家へ連れて行くと、魚や鳥で料理した様々な美味佳肴を出してもてなす。

<sup>2</sup> ここにある本文の引用及び題名、章段・ページ数の標示はすべて馬淵和夫ら校注・訳の『今昔物語集』（日本東京小学館、1974年7月初版、1989年12月第16版に拠る）。P.545-551。

その上、たった一人の娘を彼に嫁がせた。こうして、八カ月遇した後、妻の様子と周りの様子がだんだん怪しくなった。夫は不思議に思って、妻に真相を聞く。そこで、はじめてその国に人身御供の習俗があるとわかった。妻の親が彼に来てもらったのは、妻の身代りになってもらうためだった。夫はそのわけを聞いた後、妻によい刀を見つけて来てもらって、隠し持った。当日になって、彼は裸にされ、大きな俎板の上に寝かせられた。彼はこっそり股の間に刀を挟み込んでいた。やがて、祠から次々と猿が出て来て坐る。ある猿が生贄に向かって来て、まさに切ろうとした。その瞬間、生贄の男が股に挟んだ刀を手を取るや、さっと立ち上がり、大猿をはじめ、猿供を次々に取り押えた。猿どもに生贄をやめるように戒めた後、釈放した。その後、その里は人身御供の習俗がなくなった。この男はそこの長になり、妻と幸せに暮らしたわけである。<sup>3</sup>

第八話は第七話のように援助者の犬も登場しなかった上、神様が宮司に乗り移り、許しを乞うなどの筋が語られていないが、二つとも「人身御供」の筋が重要な役割を果たしている。

そもそも人身御供は早く『古事記』の神代紀にはすでに見られる。速須佐之男命が高天原から降りたところは出雲国の肥河の川上である。そこで老夫婦が娘を間に置いて泣いているのを見たことから、そのわけを尋ねた。老夫婦とは足名椎と手名椎のこと、本来八人の娘があったが、八俣の大蛇が毎年やって来て一人の娘を食う。今年もまたやって来る頃なので、老夫婦が悲しく泣いているのである。それを聞いた速須佐之男命は老父に娘を妻として所望して、大蛇退治の討略を案じ、娘を救った。

ここでの速須佐之男命はそれまでのわがままな行動や、乱暴なことをする腕白ものと打って変わって、立派な男として成長し、智慧も勇気も具えている。八俣の大蛇とは正面衝突で戦うより、彼は計略を廻らし、勝つ可能性の高い戦術を取った。まず強い酒で八俣の大蛇を酔わせてから殺し、見事にその英雄になった。その結果、

<sup>3</sup> 同注 2、p.552-568。

彼の望む通りに櫛名田比売を妻として迎えることができたばかりなく、出雲の首長にもなった。

中国の方にも人身御供の説話が見られる。『搜神記』の巻十九に収録されている「李寄」の話はその例である。

東越閩中の庸嶺に七、八丈の長さの大蛇があった。人の夢や神がかりに托して、十二、三才ぐらいの童女を生贄として食いたいと里の人達に知らせた。東治の人達は毎年生贄を出しており、すでに九人の童女を食い殺されていた。次の童女がなかなか見附らなくて、困っているところへ、李誕の末娘の寄が名乗り出た。父母が止めても彼女は聞かず、「身を売れば、金が入るから、親孝行できる」といって、密かに行った。「好劍」と「咋蛇犬」（蛇嚙る犬）を捜して来てもらった。当日劍を隠し持って、犬を連れて廟へ入り、坐って待った。あらかじめもちを作っておいた。その中に蜂蜜のからめた、いりむぎを入れていた。それを穴口に置くと、蛇がその匂いに誘われて出てきて食べた。寄はすぐ犬をけしかけて、蛇を食わせた。寄自身はさらに後の方から劍で数回も蛇を刺し殺した。蛇は痛みのあまり、庭に飛び出し死んでしまった。越の王はそれを聞いて彼女を后として迎えた。その後東治には妖怪がなくなったという。

『搜神記』の中の李寄はわずか十二、三の女童に過ぎないが、非凡な資質を持っている。九人の女童を食い殺し、国中の人々を怖がらせた大蛇と敢然と戦う。なみなみならぬ勇気の持ち主である。そして、決死戦を行うといっても、無謀な戦いではなく、前もって計略をめぐらし、「好劍」、「咋蛇犬」、「餚（もち）」などの道具や援助者をうまく利用し、大蛇を退治した。まことに知恵のある戦い方である。李寄も速須佐之男命と同じく知恵と勇気双方を備える英雄的な人物として設定されている。但し、大蛇を退治する方法は、『古事記』の方では、酒で大蛇を酔わせてから殺したのに対して、『搜神記』の方では、「餚」のほかに、さらに『古事記』の方に見えない「好劍」と「咋蛇犬」などのものを用いた。また、李寄はさらに親孝行な女童として造形されている。両親に生贄になるのを止められた時、彼

女は両親に「父母には六女もあるが、男子はいないから、跡取りがないも同然だ。私は緹縈のように役に立てないし、父母を養うこともできないから、徒に衣食を費やすことになるだけだ。生きていても益なし、むしろ早く死んだほうがまだ。身を売れば、わずかながら、銭が入るから、それで親孝行できる。これよりいいことはないではないか。」と道理で説教しようとした。儒教でもっとも高く評価される徳目「孝」を遵守し、智慧もあり、堂々と道理を説いた。いかにも理想的な人格を持つ人物である。女性でなければ、どこかの首長になれる筈である。そのような素質を持っていることから、越の王に后として迎えてもらったのである。

『玄怪録』にある「烏將軍」の中の英雄郭元振も策略を使って、豚妖怪の烏將軍の手を切って、生贄の娘を助けた。そして、彼も勇気と智慧のある人物である。迷信を信じた村人の人達は彼が烏將軍を負傷させたことから、不吉なことでも起きるのではないかと思っ彼を捕えようとする、彼はすぐ烏將軍のようなものを退治すべきであると堂々と道理を説いて、村人達を説得した。村の人達も彼の見識に折れて、一緒に豚妖怪を殺した。また、彼も優れた人格者として語られている。娘からその父母に生贄として売られたことを聞いた時、郭元振は義憤を覚え、かならず彼女を助けると誓った。実に正義感のある人である。村人からの謝礼もきっぱりと断ったほど、廉潔な士である。「正義」と「廉潔」も儒教の重要な道德項目である。彼も立派な人格者として設定されているわけである。凡そ、中国の人身御供説話の中の英雄は、勇気と知恵を備えるばかりでなく、儒教の教えもよく遵守し、見識があり、道理をもうまく説くことができる理想的な人格者として語り上げられている。

### 三、「美作国神依獵師謀止生贄語第七」と「飛驒国猿神止生贄語第八」

『今昔物語集』の方をふり返ってみよう。『古事記』と『搜神記』も退治されたのは大蛇であるのに対して、なぜここでは猿神になっ

たのか。池上洵一によると、本来山の神ないしその使者とされた猿は里に下ると田の神ともなるとされ、農耕神でもあった。その意にそわねば、農作に害をなす神として恐れ敬われていたのである<sup>4</sup>。農業時代においては地方によって猿神を祭りあげていることも考えられることから、猿神に生贄を供えるという習俗もできたのであろう。人身御供類型の中の神も各地方の文化と事情によって異なるわけである。

第七話の方では、主人公は生贄に指定された娘が「物思タル気色ニテ、髪ヲ振懸テ泣臥タル」という姿を見て、いいようのない同情の念にかられた。その後、さらに娘の親がたった一人の娘が生贄に指名されたことを嘆いているのを聞いて、その親に娘をくれるように頼み、自分が娘の身代りになると言った。娘の親はさらに方法を聞くと、「只可為様ノ有也。此殿ニ有トテ人ニ不宣シテ、只精進ストテ、注連ヲ引テ置給ベシ」と言った。親は娘さえ死なずにすむなら、自分はどうなっても構わないと言って、人に知られずに、娘をめあわせた。生贄の娘を妻として所望し、策を案じて娘を救おうという筋には、『古事記』にある速須佐之男命が八俣大蛇を退治して、櫛名田比売を救う人身御供類型説話の趣旨が見られる。しかし、第七話の方では主人公が娘の親が娘が生贄に指定されたのを嘆いたことを聞いた時、さらに親に次のようなことを言い聞かせた。

「世ニ有人、命ニ増物無。亦、人ノ財ニ為物子に増ル物無。其二、只一人持給ヘラム娘ヲ、目ノ前ニテ膾スニ造セテ見給ハンモ、糸心疎シ。只死給ヒネ。敵有者ニ行烈レテ、徒死為者ハ無ヤハ有ル。仏神モ命ノ為ニコン恐シケレ、子ノ為ニコン身モ惜ケレ。亦其君ハ今ハ無人也。同死ヲ、其君我ニ得サセ給ヒテヨ。我其替ニ死侍ナム。其ハ己ニ給フトモ苦シトナ思給ソ」<sup>5</sup>

命あつての物種、我が命を仏神にも優先させるべきであり、人間に

<sup>4</sup> 池上洵一「『今昔物語集』の猿神退治一卷二十六第七話を中心に」日本東京『日本文学研究大成 今昔物語集』平成二年十一月八日印刷、株式会社図書刊行会、p.293-305。

<sup>5</sup> 同注2同掲書、p.547。

とってはどんな宝でも子にまさるものはない。命が惜しいのも子のためである。たった一人の娘が目の前で殺されるのをただ手をこまぬいて見ているだけなど、どんな親でもむしろ死んだ方がましだという。獵師は命の大切さ、父母としての果たすべき役割・存在意義を堂々として言い聞かせた。

このような道理を説くことは『古事記』には見られず、むしろ『搜神記』や『玄怪録』などの中国の人身御供類型説話の中によく見られるパターンである。『搜神記』は 891 年までにすでに日本に伝わっている<sup>6</sup>。『今昔物語集』の震旦部にも『搜神記』の説話が収録されている<sup>7</sup>。『今昔物語集』の作者も『搜神記』の「李寄」を知ったはずである。また、主人公が猿達と戦うために前もって犬と「微妙ク磨」いだ刀を持っていったという設定にも李寄のやり方と同じである。『今昔物語集』の作者は第七話を書くに際して、『搜神記』などの人身御供の説話を取り入れたと思われる。そして、娘の親に先の道理を説くことによって主人公が見識高く、叡智に富んだ人間としてのイメージをもつことになった。勿論よく研いだ刀を持って、犬を連れて行くということも主人公が無謀でなく智慧のある人間であるという証にもなるのである。

第七話では、主人公についての描写は『搜神記』の「李寄」より詳細である。男についての最初の紹介を見ると、次のようになっている。

此人、犬山ト云事ヲシテ、数ノ犬ヲ飼テ、山ニ入テ猪鹿ヲ犬ニ令噉殺テ取事ヲ業トシケル人也。亦、心口極テ猛キ者ノ、物恐ズ不為ニテゾ有ケル。<sup>8</sup>

彼はもともとは犬を使って野生動物を狩猟する獵師であるため、動物と戦うのに馴れた人であった。その上、心が勇猛で物怖じなどし

<sup>6</sup> 藤原佐世が 891 年に編集した『日本国見在書目録』にはすでに『搜神記』の書名が見られた。

<sup>7</sup> 『今昔物語集』震旦部卷十の「病成人形医師聞其言治病語第二十三」の後半は『搜神後記』の卷六の「腹中鬼」、「於海中二龍戦獵師射一龍得玉語三十八」は『搜神後記』卷十の「烏衣人」の話をもとにして書きかえた話である。

<sup>8</sup> 同注 2 同掲書、p.546。

ない勇ましい性格の持ち主として設定されている。それは後程の猿神退治戦に勝利をおさめる伏線になる。そして、勇ましいとはいえ、娘のことを見て、同情心にかられて、彼の身代りになると名乗り出る情のある人である。しかし、猿と戦う様子を見るとかなり冷静で、理知的である。

次に、猿たちと戦う場面に眼を転じよう。

横座ノ大猿立テ長櫃ヲ開ク。他ノ猿共皆立テ共ニ此ヲ開ル程ニ、男俄ニ出テ、犬ニ、「噉、ヲレヲレ」ト云ヘバ、二ツノ犬走り出テ、大ナル猿ヲ噉テ打臥ツ。男ハ凍ノ如ナル刀ヲ抜テ、一ノ猿ヲ捕ヘテ、俎ノ上ニ引臥テ、頭ニ刀ヲ差宛テ、「汝ガ人ヲ殺シテ、肉村ヲ食ハ、此ク為ル。シヤ頸切テ犬ニ飼テン」ト云ヘバ、猿、顔ヲ赤メテ、目ヲシバ叩テ、齒ヲ白ク食出シテ、涙ヲ垂テ、手ヲ摺ドモ、耳モ不聞入シテ、「汝ガ多年来、多ノ人ノ子ヲ噉ルガ替ニ今日殺テン。只今ニコソ有メレ。神ナラバ我ヲ殺セ」ト云テ、頭ニ刀ヲ宛タレバ、此二ノ犬多ノ猿ヲ噉殺シツ、適ニ生ヌルハ、木ニ登リ、山ニ隠シテ、多ノ猿ヲ呼び集メテ、響ク許呼バヒ叫ビ合レドモ、更ニ益無シ。<sup>9</sup>

男は敵がまだ心構えができないうちに、先に手を打った。大猿が長櫃を開けようとするとき、男はやにわに飛び出して、長い間猿を食い殺すことを訓練してきた二匹の犬に攻撃させた。さすがの大猿も食い倒された。よく戦略を考えたものである。首領と思われる大猿さえ倒さすことができたなら、他の猿達は慌てふためいたりして、逃げるしかないのであろう。智慧ある人といえる。大猿は命乞をしても無駄であり、男は大猿の首に刀をさしあてた。二匹の犬もさらに他の多くの猿を殺した。生き残った猿は木に登り、山奥に隠れ、多くの猿を呼び集めて、山も響くほど呼び叫び合ったが、どうしようもなかった。猿達はとうてい彼に叶わなかった。彼の強さはここで余すところなく語られている。猿達は非常に不利な状況に陥り、猿神も手も足も出ず、ついに降参した。そして、許してもらったために

<sup>9</sup> 同注2 同掲書、p.550。

官司に乗り移り彼と三つの約束をした。即ち、

- 一、これから永遠に生贄を求めない。
- 二、村人はぜったい彼に危害を加えはならない。
- 三、生贄の女をはじめ、その父母及び一族の者に咎め立てしてはならない。

猿神は完全に敗北して、彼に命乞いをする事になった。後の官司達も男に猿神を許すように頼んだが、男はなお許そうとしなかったが、猿神はさらに堅い誓約をしたことから、男はようやく許し、猿達も山奥へ帰った。男のおかげで、この地方には生贄を猿神に供える風習は完全になくなった。男は完全に智勇双方備える理想的な英雄人物として語られている。人身御供の要素を濃くもつ英雄譚である。

第八話の方が時代的に第七話より遅れて成立したのかもしれないと考えられ、構成も内容も比較的複雑である。まず、冒頭のところでは、僧が大きな瀧に行き当って、引き返そうにも道が分からなくなる。死ぬつもりで、瀧に踊り入ると、無事に通り抜けることができた。瀧を隔てて、別世界が展開する。このような設定には『桃花源記』の冒頭「緣溪行，忘路遠近，忽逢桃花，……復前行，欲窮其林。……豁然開朗，土地曠空，屋舍儼然。」の趣を濃く漂わせている。また、里人が僧を見ると、争って彼を自分の家へ招待しようとするところにも『桃花源記』の「見漁人，大驚，問所從來，具答之，便要還家，為設酒殺雞作食。村中人聞有此人，皆為問訊。……餘人各復延至其家，皆出酒食。」の趣を感じさせる。但し、ここで僧を自分の家へ連れて行こうとするのは別の下心をもっていたのである。第八話は『桃花源記』の趣旨をとり入れたと思われる。

しかし、第七話の方では最初から主人公が英雄的特質をもっている人として語られるのに対して、第八話の方では主人公は当初むしろ消極的、受動的な印象を与えている。浅黄色服の人が僧を家へ連れて帰ると、すぐ鳥や魚などの料理を出して、彼をもてなした。僧はもともとよく戒律を守り、肉や魚を食べなかった。その家の主人

はそれを見て、すぐ来て、食べるように勧めた。その上、娘をめあわせると言った。僧は逃げる術もなく、あまり主人の意に逆らうと、殺されるかもしれないと思って、受動的に主人のいいなりになって、魚や肉も食べてしまい、妻ももつようになる。僧は完全に強制的還俗させられたのである。それから、舅は毎日御馳走を食べさせ、どんな華麗な服でも着させ、妻とも仲睦じく暮した。本当に「楽しき世界」での毎日である。

しかし、読者も僧と同じような疑問を抱えている。なぜ主人がここまで僧を手厚くもてなすのであろうか。さらに続きを読むと、しだいに疑問がとけるようになる。作者は入れ子型の箱でもあけるような手法で徐々に真相を示していく。八ヶ月が過ぎた後、妻が悲しげな様子になってしまう。夫が聞いても、わけを教えてくれない。またある日、その家に来た客と主人のかわしたあやしげな会話を耳にする。しかし、主人はそしらぬ顔をして、客が帰った後、また、彼に食物をもってこさせた。それを食べるにつけても、妻は思い嘆く。妻の悲しい様子と客の言ったことと思いあせると、それは自分の身にかかわる重大なことと思うようになり、おそろしくなると、妻に尋ねてみたが、妻は何か言いたげな顔つきをしながら、やはり何も言わない。周囲の雰囲気もしだいにあやしくなった。僧は聞くべきところもないが、妻をふくめ、皆が自分に何を隠しているということに気付いた。そのうち、里の人々が大騒ぎをして、御馳走の用意を始める。妻の泣き悲しむさまは日ましに募ってゆくので、夫はついにこらえられず、妻になぜ自分に隠し事をするのかと言って、恨み泣きをした。妻もわざと隠すのではないと泣きながら、彼に一部始終を打ちあげた。

一見桃源郷のように見えるこの里には人身御供のおそろしい習俗があり、家々は順番で生贄を出すことになっている。生贄を捜し得ない場合は自分の子を出なければならない。また痩せてみすぼらしい生贄を出すと、神様が荒れて、その年は不作になり、人も病み、里も穏やかにならない。夫はそこですべてを理解した。何故里に着

いた時、皆自分の家に来てほしくとさかんに要求したのか、またなぜここ数ヶ月の間、ここまで大切にしてくれたのか。それはすべて自分に生贄にならせるためだ。夫はそれを知った後、泣きもせず、逃げようともせず、むしろ神の形と生贄の食われ方についていっそう詳しく聞くことになる。そして、妻によい刀を捜してもって来てもらった。その刀を手に入れて、十分に研ぎ澄まし、隠しもった。また、前よりいっそう元気を出して、張り切り、食べものもよく食べ、体を太らせた。

主人公は以前の消極的、受動的な態度とうってかわって、積極的、能動的に動き出したわけである。今まで命をまもるために、人の言いに動いて来た。が、このままでは殺されてしまうと悟った。今度はむしろ命を守るために積極的、能動的に動き出したのである。一旦気持がかわると、勇気と知恵も出て来た。よい刀も隠しもって、猿神と対決するつもりでいる。

当日になって、彼は山の中にある大きな祠へ連れられて行った。飲食歌舞を興じた後、彼が呼び出され、裸にされ、大きなまな板の上に寝かせられた。彼はこっそりと股の間に刀を挟み込んだ。やがて、一の祠と呼ばれている祠の扉が「ぎいっと」鳴って開く。そのとたん「少シ頭毛太リテ、ムタツケク思ケル」。続いて、次々に祠の扉があいてゆく。彼は刀も用意して来ており、猿神と戦うつもりでいるが、いざ猿が扉をあけ、入って来ると思うと、やはり恐怖をおぼえたのである。恐怖の念を抱くが、大変注意深く敵の動向を見た。その時、まず大きさが人間ほどの猿が祠のわきから現れた。それから、一の祠の簾を押し開いて、さきの猿より一段と大きい猿が堂々と出て来た。こうして、祠から次々と猿が出て来て並んで座った。すると、一の祠の猿が何か「きゃっきゃっと言う。それに応じて始めに祠のわきから出て来た猿が真魚箸と刀を取って生贄に向い、まさに切ろうとした。間一髪の時、男は攻撃し始める。股にはさんだ刀を手取るやさっと立ち上がって、猿に向った。しかし、男が向ったのは彼を切ろうとした猿ではなく、猿の首領だと思われ

る一の祠の猿である。これも彼が考え付いた戦略であろう。首領さえ取り抑えれば、他の猿も簡単に片付けられると思った。実際彼の思ったとおりに、急に飛び出したので、大猿が「周テ仰様ニ倒タルニ」、男はそのまま起き上がらせることなく、のしかかって踏みつけ、刀はまだ突き立てずに「己ヤ神」と言うと、その猿は否定もしないで、手をすり合わせて、命乞いをした。

大猿はとりおさえられた後、完全に普通の動物になり、神らしいところはまったくみえなかった。人の言葉も話せなかったのである。男は大猿を縛った後、さらに第二、第三の猿とさきほど彼を切ろうとした猿を大猿に呼ばせてこさせ、縛った。そして、四匹の猿を前に追い立て、裸のままで里に降りて来た。今度は、里の人々が彼のことを「神ニモ増タリケル人」と恐れまどった。彼は四匹の猿に二度と生贄を求めてはならないと言い聞かせた後、ゆるしてやった。又里の人々を呼び集め、残った祠を焼払った。これで里の人々は完全に彼の言うことを聞くようになり、彼はついにその里の長になった。

この男は絶対絶命の時、能動的、積極的になり、知恵を働かせ、勇しく猿神と戦った結果、みごとに勝った。そのため、自分の命を守っただけではなく、さらにその里の英雄になった。第七話と構造や内容はいささか異なっているが、二人とも猿神退治に成功し、人身御供の習俗を廃除させ、人々に敬畏させる英雄になったのである。この二つの猿神退治の説話はともに人身御供の要素をもつ英雄伝である。

#### 四、「補江総白猿伝」

『中国の唐代伝奇の小説にも猿神退治の話が収録されている。顧氏文房小説家藏宋本の中に「補江総白猿伝」という小説が収録されている。『太平広記』巻四百四十四の畜獸十一にも「歐陽紇」という題名で同じ話が収録されている。その下には「出続江氏伝」とある。即ち『太平広記』の「歐陽紇」も「補江総白猿伝」もおなじ話を収

録したものである。言葉遣いにこそ些細な違いがみえるが、内容は殆ど変わらない。「補江総白猿伝」は文字の表現が「歐陽紘」よりも勝れているので、ここでは「補江総白猿伝」の内容に拠ることにする。その筋は凡そ次のようになっている。

梁の大同の末、歐陽紘という将軍が南征で長楽に至り、かなり、山のけわしいところまで入った。その妻も同行させたが、妻の方はたいそう美しい人である。その部下は彼に「美妻をここに連れてくるべきではない。ここには神がおり、よく女を盗んでいく。特に美人は免れられないので、用心して守った方がよい。」と助言を与えてくれた。紘は大変恐ろしくなり、妻を密室の中に隠し、十数人の下女に守ってもらったが、ある風雨の強い夜、妻はとうとう盗まれてしまった。紘は大変憤り、また痛ましく思った。病と称して、休暇を願い出て、軍隊をそのままそこに駐在させ、方々に出掛けて、妻を捜しまわる。一ヶ月過ぎた後、百里離れたところに妻の靴を見つけた。紘はいっそうかならず妻を捜し出すと意を固めた。さらに十日あまり過ぎた後、もとの場所から二百里離れたところに、南向きの山が在り、紘達が山の上に登ると、別世界が開けた。そこには数十人の婦人が華麗な服を身にまとい、楽しそうに歌を歌ったり、談笑したりしている。婦人たちは紘を見て、大変驚いて、ここへ来たわけを尋ねた。紘は理由を話すと、婦人達はその妻に会わせて後、白猿退治の方法を教えてくれた。紘は美酒、麻糸と食用犬を準備して、十日後に再度行った。まず食物をおく倉に身を隠し、かなり時間がたってから、婦人達が出て来て、彼を招き入れる。紘は武兵器をもって中に入ると、白猿は手足を縛られている。紘達は武兵器で白猿を切っても鉄や石にあたったようで、切ることができない。へその下に刺し入れると、血が流れるように噴出した。白猿が死んだ後、紘はそこにあつた金銀財宝を婦人達にわけあたえたあと、妻を連れて帰った。

この小説の作者は不詳である。紘の妻が生んだ子は歐陽詢のことである。詢の外形は猿に似ていたことから、この作品は作者が詢を

誇るために書いたものであるという説もあるが、真偽はわからない。しかし、特殊な才能を有する人はしばしば特殊な人相を有している。歐陽詢もその一人であろう。そして、中国の南部には古くから猿が女性を盗むという伝説が言い伝えられていた。『搜神記』巻十二には「猥国馬化」という題で次の説話が収録されている。

蜀中西南高山之上，有物，與猴相類，長七尺，能作人行。善走逐人，名曰「猥國」，一名「馬化」，或曰「猥猿」。伺道行婦女有美者，輒盜取將去，人不得知。若有行人經過其旁，皆以長繩相引，猶故不免。此物能別男女氣臭，故取女，男不取也。若取得人女，則為家室。其無子者，終身不得還。十年之後，形皆類之。意亦迷惑，不復思歸。若有子者，輒抱送還其家。產子皆如人形。有不養者，其母輒死。故懼怕之，無敢不養。及長，與人不異，皆以楊為姓。故今蜀中西南多諸楊，率皆是猥國馬化之子孫也。

「補江総白猿伝」の白猿とこの説話の「猥國馬化」とは次のような類似点が見られる。

- 一、白猿も猥國馬化も女性をさらっていく。
- 二、女性をさらっていく時に、まわりの人達は全然気付かない。
- 三、子を大切にする。猥國馬化の場合は母親が猿との間に生んだ子を育てないと、命を失う。「補江総白猿伝」の方でも白猿が臨終の時に紇に子を大切に育てるように言い付けた。

作者は「補江総白猿伝」を書く際、中国南部のこの伝説を参考して書き上げたものだと思われる。しかし、「猥國馬化」は断片的で、怪異ごとを記録する性質が強い、「補江総白猿伝」の方では一つのまとまりのある話を語るものである。又景物や人物についての描写もより詳細に行った。白猿の住むところについての語りを見ると、次のようになっている。

遠所舍約二百里，南望一山，葱秀迴出。至其下，有深溪環之，乃編木以度。絕巖翠竹之間；時見紅綵，聞笑語音。捫蘿引絙，而陟其上，則嘉樹列植，間以名花；其下綠蕪，豐軟如毯。清迴岑寂，杳然殊境。東向石門，有婦人數十，帔服鮮澤，嬉遊歌笑，

出入其中。

白猿の住むところは人里遠く離れたところの山にある。その山は大変けわしい。山の下は、さらに深い溪流に囲まれている。筏で溪流を渡ると、蔓や組いとを頼らないと、登ることができない険しい山となる。そこは完全に外界から隔絶される場所である。山に登る途中では時折、翠緑の竹林の中から赤い絹が見えたり、人の声が聞こえたりした。山の上に着くと、珍しい木がたくさん並んで植えられており、中には有名な花もまぜられている。その下一面には草がたいへん茂って生えている。踏むと、絨毯のように柔かい。幽雅閑寂で、俗世と異なり、桃源郷の趣を濃く漂わせている。作者は白猿のすまいを書くに際して「桃花源記」を取り入れたことは明白である。

この小説は特に白猿について筆を費やした。白猿はどのように語られ、またそれによって何をもの語ろうとするのかを見てみよう。

白猿は最後には歐陽紇によって殺されたが、それは歐陽紇一人ではできない。歐陽紇は白猿の住む理想境に至ると、そこに数十人の婦人がおり、彼に「何故ここへ来たのか」と尋ねた。彼は仔細に話すと、婦人達は彼の妻への愛情に心を打たれたのであろうか。彼を助けてくれることになった。婦人達はまず彼に「賢夫人がここへ来てから、すでに一月余り立ったが、今は病気で寝ている。見舞いに行ってください。」と言う。妻は彼を一目ふりかえって、すぐ速く去るように手を振った。白猿に見られたら、殺されるであろうから、彼に早く出て行くように教えたであろう。そこを離れた後、婦人達はさらに彼に白猿を退治する計略を話した。「ここは神物の住居である。その神は力が強くて、人を殺すことができる。百人が武兵器をもって、彼と戦っても、勝つことができない。白猿が帰って来る前に、早く逃げて、十日後に美酒二石、食用犬十匹、麻糸十斤を持って来てください。私達がいっしょに彼を殺す策略を考えよう。その神はいつも正午に来るから、あまり早く来ないでください。」と白猿を退治する道具をあらかじめ彼に用意して持ってくる

るように言い聞かせた。十日後、紘は言われたものを全部手に入れて、再び行くと、婦人はさらに詳しく策略を教えてくれた。「彼は酒好きで、いつも酔うまで飲む。酔うと力試しをする。私達はきぬで彼の手足を寝台に縛る。彼がひとたび躍ると、全部とけてしまう。三幅まで結ぶと、解くことができない。今度はさらにきぬの中に麻糸を入れると、解くことができないと思う。全身は鉄のように丈夫だが、臍の下数寸の所をいつも気を付けて守っているから、そこが彼の弱点だと思う。」婦人達は白猿が酒に酔うと、絹で力をためず癖を知っていたから、それを利用して、その中に麻糸を入れて、彼が解くことができないように縛っておいた。また、白猿は全身鉄のように丈夫だから、縛られてもかならずしもを殺せるとはかぎらないから、さらに白猿の弱点を教えたので、紘はうまく白猿を殺すことができた。歐陽紘は婦人達の策略で白猿を殺したのである。しかし、白猿の臨終の言葉「此天殺我，豈爾之能」という言葉からすると、白猿は紘に殺されるのは天の意思であると考えていた。また、婦人達の説明によると、今年の秋、白猿は急に愴然として、皆に「吾為山神所訴，將得死罪。亦求護之於眾靈，庶幾可免。」と言った。しかし、先月は物忌の時、石坂から急に火が出て来て、彼のよく読む木簡を焼いた。白猿は悵然として「吾已千歲，而無子，今有子，死期至已。」又、「此山複絕，未嘗有人至，上高而望，決不見樵者。下多虎狼怪獸，今能至者，非天假之。何耶？」と言った。白猿は山神に訴えられたため、天帝に死罪と判じられた。白猿は諸神靈に庇護をしてもらうように願った。最初は何とか免れられると思ったが。物忌の時、大切な木簡が火に焼かれてしまった。白猿は凶兆として見て、やはり死からは免れられないと考えた。即ち、表面的には婦人達の策略と欧陽紘の能力で白猿を殺したが、実はすべて天の意思であったのである。「天殺我 豈爾之能」とあるように、天の助けがなければ、欧陽紘はとて白猿に勝つことができないのである。そして、「吾已千歲，而無子，今有子，死期至矣」とあることからすると白猿もずっと子がほしかったのであり、その生まれてくる子にも

愛情をおぼえていた。なかなか人間に近い心をもっているのである。同情の涙を誘われなくもないが、白猿は決して只者ではない。この作品は最初から白猿を神通力のもつ神として設定している。紇の部下が紇に当地に美女をさらっていく〈何物〉かがあると説明する時にも「地有神」と言った。婦人達も白猿のことを「神物」と称する。紇は妻が盗まれないようにあらゆる手を尽くしたが、やはり盗まれてしまった。白猿は超自然的な能力をもつ神物である。「有物如匹練，自他山下 透至若飛 徑入洞中」とあることから白猿は自由に空を行き来できる。また、「有美髯丈夫長六尺餘，白衣曳杖，擁諸婦人而出」とあることから、白猿は変幻自在であり、猿の身でありながら、「美髯丈夫」の姿で現れることもできる。「所居常讀木簡，字若符篆，了不可識」とあることから、白猿の読んでいるのは人界の書物ではなく、道士が読む識諱のようなものだと思われる。「所須無不立得」と、何でもほしいものがすぐ手に入るのはすでに仙術を身に付けていたのである。将来のことも予知でき。自分の死をあらかじめ知っているばかりでなく、自分の子供が「將逢聖帝，必大其宗」と予知することもでき、この作品は猿神退治の話であるが、白猿というキャラクターは神仙味を色濃く漂せているので、伝奇性の濃い神仙譚になっている。

## 五、結び

前以上『今昔物語集』の卷二十六の「美作国神依獵師謀止生贅語第七」、「飛弾国猿神止生贅語第八」ならびに唐代伝奇の「補江総白猿伝」を通して日中両国の猿神退治譚を考察してきた。残された課題はまだ多くあるが、凡そ次のようなことが言えよう。

両国の文学者が猿神退治譚を作品として作る際は、日中両国の先行文学『古事記』（『今昔物語集』の第七話）『搜神記』（『今昔物語集』の第七話）と『桃花源記』（『今昔物語集』第八話と「補江総白猿伝」）の筋や趣きを取り入れて、人間がみごとに猿神を退治するという説話を語りあげるが、その相違点も見られる。即ち、

- 一、『今昔物語集』の猿神が人身御供を求めるのは人間を食べるためであり、動物的性格を強くもっている。「補江総白猿伝」の方では白猿が女性をさらっていくのは交合のためである。しかも人間と同じく審美眼をもっており、美しい女性のほうを選ぶ。人間との間に子まででき、その子にも愛情をおぼえる。完全に擬人化されている。
- 二、『今昔物語集』の猿神は人間の言葉ができない。人間とコミュニケーションをとる時は、宮司を通して行う。神とはいえ、一度も神通力を使い、人間より優れていることを示すことはない。「補江総白猿伝」の白猿は神通力をもっており、神仙味をいろ濃く漂わせている。
- 三、『今昔物語集』の方では、英雄一人の力と智恵で猿を退治する。たとえ犬の援助があっても、英雄の智恵で考え付いた計略、英雄の優れた能力をとりたてて語られている。「補江総白猿伝」の白猿は一見婦人達の策略と欧陽紇の力によって殺されたが、本当は神仙界の掟を犯し、山神に告発され、天帝に死罪と判じられたから殺されたのである。神仙譚的要素を漂わせている

即ち、同じく猿神退治ではあるが、『今昔物語集』の方では人身御供説話要素をもっている英雄譚として語り上げるのに対して、唐代伝奇の「補江総白猿伝」の方では伝奇的な神仙譚として語られたものといえよう。

